

# 陶芸学習における技術習得と自己表現の相互構成課程に関する考察

## つくる・使う行為での用と美

### 目的

生徒が工芸的なものづくりに取り組む際、制作行為に必要な技術をどのように学び、それを制作工程の中で自己の表現にどのように生かしていくのか、また技術と表現の相互作用がどのように生じるのかを考察する。中学校では美術と技術、特別支援学校では美術とキャリアの授業において、目的をもった器づくりの授業実践を行った。器の機能性に関わる技術的要素としての「用」と、生徒自身の表現としての芸術的要素である「美」が、どのように取り込まれ、成果物にどのように現れるのかを明らかにすることを目的とする。

### 方法

中学校では、各自が育てる植物のための植木鉢を制作した。デザイン、制作、完成した植木鉢での植物栽培を経験し、生徒の中で作る行為と使う行為での用と美の関係がどう変化するのか、アンケート調査をもとに考察した。

特別支援学校高等部では板づくりによる食器づくりに取り組んだ。成形、施釉、焼成の過程を経て出来上がった食器を他者に使ってもらうために、どのような工夫を試みるのかに注目したが、実際には他者を意識した作品制作まではできず、自分のつくりたいものをつくる活動が中心となった。

## 活動内容と考察

中学校

### デザイン

【技術】  
自分が育てる植物の情報を集める

【美術】  
機能と見た目の工夫を両立させたデザイン

↓

- ワークシートを使い、サイズや形を細かく記載しイメージを膨らませる

えんどうを育てるのに支柱が刺せる植木鉢の深さは？

使うのが楽しくなるような装飾



デザインのアイデア

### 成形

【美術】  
デザインを変更する生徒 76.5%

粘土に触っている中での発想の変化や周りの会話から発想を得て 42%

時間不足で 26.1%

技術的に難しかったので 12.6%

↓

- 自己表現+時間や技術的な問題からの変更=作る行為での省察と工夫



見た目の工夫例      機能の工夫例

### 使用

【技術】  
植物を育てるための工夫  
日当たり、雨風、虫対策など

↓

- 「自作」が生んだ愛着と責任感
- 鉢の機能性と植物の成長の関係への気づき（失敗からの学び）
- 自作鉢の課題を乗り越えるための技術的工夫（問題解決への学び）



深さを確保した例      サイズが小さかった例

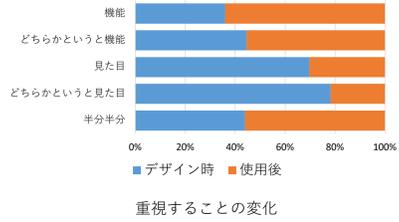
### 省察

【技術】  
水やりの頻度や日照量の違い、植木鉢の大きさにより収穫に差

【美術】  
機能と見た目の工夫に対する変化

↓

- 植物を育てた成功と失敗体験からの学び解決策の考案
- IoTを活用した栽培・技術の見方・考え方 植木鉢のデザインの見直し



重視することの変化

特別支援学校高等部

### 材料を知る

触感を楽しんで粘土を触り形づくる

↓

- 回を重ねるごとに集中する時間が長くなる



初めての制作

### 繰り返しの技術の獲得

力のコントロール

↓

- 1年を通して繰り返すことで、力の入れ方や、その加減をコントロールできるようになる
- つくる技術が向上し皿以外の器も制作し始める



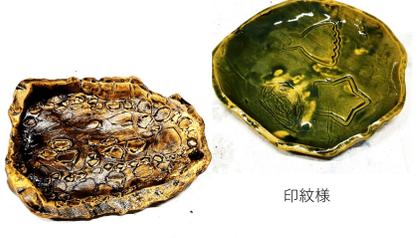
力が必要な粘土のばし      円柱の作品づくり

### 加飾・施釉

好きな模様・釉薬を施す

↓

- 根気よく模様を刻む、好きな印を押すなど、個々の得意な行為に主体的に取り組む
- 施釉方法は性格が顕著に現れる（何度もつける生徒、手本通りに手際よくつける生徒など）



パターン模様      印紋様

### 職業としての課題

使う人や目的を明確にした作品づくり

↓

- 今後、他者に使ってもらう作品を制作し、販売する体験を実施
- 販売することで勤労の喜びや、自己肯定感の向上に繋げたい



指で模様をつけた角皿

## 結果 ～美術×技術・キャリアの相乗効果～

中学校では植物を育てるという「用」と自分の作りたい造形「美」とがどのように共存するのか、また、使用することで起きる省察から何を学ぶのかが明らかになった。つくる行為では「美」を重視した生徒が多かったが、使用後の振り返りでは、「用」を重視すべきであったとの声が多かった。教科を横断した「自分の作品の中で命が育つ」という経験が、技術におけるIoT活用以前の根本的な「育てる意欲」を下支えしていることに加え、問題解決のための考案を生むことが明らかになった。

特別支援学校では何度も繰り返し粘土を操作することで、手指の触覚にて技術を習得したうえで、そこに自らの得意な装飾を主体的に表現することが明らかになった。1年間という期間ではあるが作業を楽しみながら技術が向上したことから、今後は職業科として他者のためにつくることを意識した活動へと繋げていくことが課題となった。



収穫されたハツカダイコン